

# 高山

たかやま  
高山の原生林を守る会

会報 第 63 号

2007年 12月



## 高山・的場川周辺紅葉観察会に参加して（93回観察会から）

松井さき子

今年初めての観察会、芋煮会。集合場所で吾妻山をバックにコスモス畑の風景をデジカメに収め、いざ出発。色づき始めた木々を眺めながら、カエデ、モミジ、ナラ・・・と木の実、花の実など観察し、説明を聞きながら歩いていくとブナ林が現れてきた。

私はブナの樹が大好きです。私の山歩きはブナで始まりブナで終わるといった感じです。ブナの木を見ると神聖な気持ちになり心豊かになるような気がします。樹の太さ、高さ、木肌、模様はもちろん、上部で枝分かれしているもの、ごつごつしてふき出物があるみたいなもの、しわがあり節くれているもの・・・とさまざまな表情を見せてくれます。また新緑、梅雨のブナ、紅葉、葉の落ちたブナ、雪の中のブナ、天気、時間によってもまったく違う表情を見せてくれるんです。その美しいブナを見るたびに「うわーすごいきれい」と叫んでしまいます。感動してシャッターを押してしまいます。

今回の観察会でもササヤブを分け入り300年は経っているだろうと言う、背が高く、幹周りも太く、縦しわのゴツゴツとした見事な素晴らしいブナに出会いました。感激！！しばらくその場所に止まっていたい気がした（伊藤さんはスケッチしていましたヨ）。福島の宝物ですね。大切に守っていかなければ！！芋煮会では途中きのこ取りの方からムキタケというきのこを頂き、それを入れて粕の入った汁と2種類作っていただきおいしかったです。色々アクシデントがあったようですが、楽しい一日でした。感謝します。



## オオウラジロノキの果実 (94回観察会から) 鎌田和子

巨大ブナのところで、直径2センチくらいの球形の果実を拾った。アズキナシやウラジロノキの果実とは大きさが違う。今まで見たことがないものだ。さくらんぼのように、果実が2個、柄についている。全体は黄緑色をしているが、一部が淡紅色を帯びている。ズミ? 思いつく植物名をあげてみた。少し前を歩いていたYさんは、「やまなし、クラムボン。クラムボンは笑ったよ」と宮沢賢治の世界



を想起し、Oさんは、「その果実の〇〇の感じはバラ科ね」と専門的な観察力を発揮する。さて、佐藤守さんは何の果実というのだろうか。写真を撮っていて、みんなからやや遅れてやってきた守さんは、その果実を見るとすぐに「ウラジロノキ、でなければオオウラジロノキかな」と言われた。ここいらにオオウラジロノキが植生しているから、その果実があってもおかしくないと付け加えられた。オオウラジロノキ! そんな名前の樹木があったなんて知らなかった。果実が大きいからオオウラジロノキなのかしら。ウラジロノキとどう違うのだろう。家に帰って調べる楽しみができた。またもや宿題を抱えて帰ることに心が躍る。

夜、家族が寝入ってからそっと起きて、図鑑「樹に咲く花」のオオウラジロノキの果実の解説を読んだ。拾った果実は確かに守さんが言われたとおりオオウラジロノキの果実だ。オオウラジロノキはリンゴ属、ウラジロノキはナナカマド属であることも初めて知った。翌日、物好きの虫がわいて、オオウラジロノキの果実のタネを取り出してみた。ついでに果肉の味見もした。酸味が強く、苦味も感じ

たが、まさしくリンゴの味だ。直径2センチの果実にしては種子の長さが7ミリもあって大きいなど感じた。そうか! 種を残すためにはタネは大きくないとね、などと勝手に納得してしまった。

信夫山で拾ったウラジロノキの果実があることを思い出し、そのタネを取り出して比べてみた。物好きの虫はエスカレートしていくものだ。写真の上の方のタネがオオウラジロノキ、1個分。リンゴ属らしく、リンゴのタネそっくり。下のほうはウラジロノキの果実2個分のタネ。リンゴのタネとは少し異なる感じ。名前は似ていても属が違うにはそれなりの違いがあつてのことなのだろうか。たったこれだけのタネを観察しただけで、あれこれ分かったようなことを言うのはお笑い草だけど。植物の世界に足を踏み入れたようでワクワクしてきた。巨大ブナを見に行き、オオウラジロノキの果実と出会えてラッキーだった。私にとって新たな樹木を知るチャンスになったこと、植物の分類の階層の名前(界、門、綱、目、科、属、種という順にグループが小さくなる)を大まかに知ったことは収穫だ。来年の観察会にはどんな出会いがあるのかなと思いを馳せつつ、今年最後の観察会の締めくくりとして記してみた。



## 鹿狼山から 3. 気になるあれこれ 小幡 仁子

鹿狼山(かろうさん)は私が住む新地町にある。町民の鹿狼山に対する思いは深く、町のシンボリック存在である。私は昨年は30数回、今年も30回近く登って、四季折々に咲く花や樹木の緑を楽しんでいるところである。因みに毎日登っている人もいるし、100回くらいという人もザラである。そのくらい身近な山である。

ところで、今年の11月ごろから町が「鹿狼山を自然公園として整備する」ということで工事が始まった。私としては、これ以上の整備は必要ないし、花が少なくなったり樹木を傷めたりするのではないかと心配だった。人工的な公園ではなくて、自生する植物を大事に保っていく方向で進めてほしいと思った。



それだけでなく、ずっと前から前知事の登頂記念碑が山頂にド〜ンと建っている。それも黒々とした御影石の立派なヤツである。何百万円もかけてせつかくの景観を駄目にしており、見る度に忌々しいと思うから、町のHP

間もなく山頂だという時に見えてくる記念碑。無いほうが望ましい。にあれを撤去した方がよいと書き込んだ。でも、あれを撤去するにもお金はずいぶんかかるから、それも税金の無駄使いになるんじゃないかという人もいた。結局あの記念碑はこのままほおって置かれるのかもしれない。一度建てたものは壊すこともままならないのだ。これが気になることの一つ。

次に気になることは、自然公園に話を戻すと杭とロープが増えたことである。まず、山頂から北へ向かってのくんだり道にずっと杭が打たれ、ロープが張られた。ここはもともと急な登山道ではあった。自然公園としては、安全確保を考えたのだろうか。昨年11月に基礎工事が終わり、そのときにコンクリートのブロックがずっと連なって並んでいるのに驚いた。あのコンクリートの下にある樹木の根はどうなっているのだろうか。やがて、枯れてしまうのではないか。そして、登山道の幅もずいぶん拡張された。こんなことをせずとも、今までみたいに、木を伝いながら少しずつ降りたり登ったりしてもよいのではないか。それに、山頂から北のほうへ向かう登山者は本当に少ないから、この杭とロープの利用価値はどうなんだろうと思う。



クマシデの木のそばには杭と鎖が・・・

昨年11月の基礎工事

基礎工事の上に杭が立ちロープが張られた

山頂から北へ向かう登山道の杭とロープ



この他にも、登山道の途中に杭と鎖が張られた。砂利が敷かれ、登山道はかなり広い。二人で並んで歩いても十分くらいはある。おまけにこの杭が打たれているところは一段高くなっている。尾根が細くて滑落の危険性があるというなら分かるが、ここを誤って落ちていく人がいるだろうか？ここに、杭を打ち鎖を張ることを決めた人に、なぜここにしたのか聞きたいものだ。ここは右側はヒノキの林で薄暗いが、杭が打ち込まれたほうは、クマシデが林立しており、その根元には春はカタクリが美しく咲く。当然花も減るだろうし、景観だって良くないと思う。



それから、登山道の入り口には車止めの杭も立てられた。下の鹿狼旅館脇に立派な駐車場があり、ここまで入るのは、工事用の車両だけだと思われるが、こんな物が本当に必要なのか？

また、新しく拓かれた登山道には下のようなテラスができていた。「展望台」という名目であるが、これも本当に必要なのか？鹿狼山はただの公園になってしまうのだろうか。とても気になる。

テラスや車止めなどが新しくつくられた

## 「第28回東北自然保護の集い岩手県大会」参加報告

高橋 淳一

第28回東北自然保護の集い・岩手県大会が11月10日・11日の2日間にわたり、レトロな趣が残る岩手県花巻市「大沢温泉泉自炊部」で開催されました。参加者は100名近く、福島県からは高橋が唯一の参加でありましたが、東北の仲間との再会、そして深夜まで及ぶ活発な議論と有意義な時間を過ごすことができました。特に「東北の自然保護の集い」では初となる核問題を取り上げたことは、汚染問題がいかに深刻であるかと同時にエネルギー需要と温暖化対策が相まって、今後ますます複雑化していくことの前兆であり、私達の生活スタイル、価値観を改める時期に来ていることを痛感しました。以下に2日間の要点を報告します。

初日、行政関係者の挨拶後地元岩手県の「三陸の海を放射能から守る岩手の会」事務局長永田文夫氏並びに「京都大学名誉教授」河野昭一氏の記念講演に続き各県からの現状報告が行われた。記念講演では永田氏より青森県6ヶ所村に建設された核燃料再処理工場の操業（現在試験操業中）によって海洋や大気中へ排出される放射性物質には「原発並の排出基準」を求めているにも関わらず、法的制約が無いことから、対策を講じようとする行政や「日本原燃」の姿勢について話された。さらに、それら放射性物質が増大、拡散することによって懸念される健康不安に対しても、一次産業への影響を懸念し（風評被害）、かつて「再処理工場誘致」に反対した地域住民までが口を閉ざしている現状が報告された。河野氏からは天然林（国有林）の現状についての報告において、政策転換をしたはずの林野庁が、国有林に僅かに残る天然林の伐採を今でも継続していることへの懸念と警鐘を訴えた。また、続いて行なわれた各県からの報告後、河野氏が中心となって進めている「国有林内の天然林を環境省へ移管し保全する改革に関する請願書」について、参加団体からの賛否両論様々な意見提起があり、最近では稀な活発な議論が行なわれました。（意見集約：請願署名は各団体独自の判断で行なう。）

2日目は「野生生物との共生を考える」「環境教育と登山マナー」「公共事業を考える」の3分科会の後、全体集会に移り、分科会の総括報告が行なわれた他、30回大会に向けての意見提起、そして最後に以下7項目の大会アピールを採択し閉会となりました。とりわけ二年後の30回大会については福島県が開催県であり、「今後の活動の方向性」を示すような大会にしてほしいなどと、期待を大きいことから、早期に準備体制を整備し取組んで行きたいと思いました。

### 【大会アピール】

①六ヶ所村からの放射能排出に関しては明確に反対する。②林野庁が管理する天然林の内、原生的な天然林については、伐採を中止すること。③緑資源機構が進める大規模林道について、現在進行中のものに関しては凍結し、完成したものについても「時のアセス」の対象とする。④ダム建設については、着工しているもの計画中のものを含めて見直しを求める。⑤生物多様性の観点から、林野庁の指定している「緑の回廊」を北海道、関東地方の設定を求める。⑥子供たちの生物や環境に対する関心を高めるためのアクションを連動し、活発化させていく。⑦野生動植物に関する情報を共有しきめこまやかな配慮が出来るよう、緩やかな組織作りを模索する。

## 「高山の原生林を守る会創立20周年記念自然展」開催報告

自然展は11月14日～11月19日までの期間、市民ギャラリーで開催されました。展示内容は高山の原生林を守る会20年の歩み、高山の植生区分、高山の植物、観察会、登山道破壊の記録写真、草木染め、木の実細工、山でスケッチした水彩画、巨木の版画、押し花のアンサンブルとバラエティーに富んだものになりました。

開催期間中の来場者は、会員の方々を含め200名余りでした。手作りの作品群はどれも好評で、熱心に見入る来場者が目立ちました。ささやかですが、参観された方々は、自然の多様性の一端に触れることができたかなと思います。

作品の作成、展示、会場設営、受付など、ご協力いただいた会員の皆様、ご苦労様でした。



# 高山の原生林を守る会 2007年定期総会報告

日時：2007年11月25日（日）

13：30～15：30

場所：サンスカイ土湯

## (1) 2007年活動報告

- 2月4日（日） 第88回自然観察会（仁田沼）（17名）
- 2月18日（日） 国有林保護監視員委嘱式（福島森林管理署）（6名）
- 4月22日（日） 第89回自然観察会（高山）（18名）
- 6月2日（土） 第90回自然観察会（龍ヶ岳）・鳩峰峠植林ボランティア（18名）
- 6月3日（日） 東大巓湿原植生回復ボランティア作業（6名）
- 7月1日（日） 第91回自然観察会（西大巓）誘導ロープ補修ボランティア（14名）
- 8月25日（土） 東大巓・弥兵衛平湿原植生ロープ補修ボランティア作業（2名）
- 8月26日（日） 第92回自然観察会（幕川温泉周辺）（17名）
- 10月7日（日） 西吾妻小屋周辺誘導ロープ補修ボランティア（2名）
- 10月21日（日） 第93回自然観察会（高山的場川）（16名）
- 11月10日（土）～11日（日） 第28回東北自然保護の集い（岩手県花巻市大沢温泉）（1名）
- 11月14日（水）～19日（月） 20周年記念自然展（市民ギャラリー）（来場者200名）
- 11月25日（日） 第94回自然観察会（高山山麓）

## (2) 2007年高山の原生林を守る会会計報告書（11月18日現在）

収入の部

科目	予算額 (A)	決算額 (B)	増減 B-A
前期繰越金	164,438	164,438	0
会費	35,000	45,000	10,000
観察会参加費	34,500	35,400	900
書籍販売	0	0	0
カンパ	0	19,032	19,032
謝金等	0	110,000	110,000
その他	0	5,746	5,746
小計	69,500	215,178	
合計	233,938	379,616	145,678

支出の部

科目	予算額 (A)	決算額 (B)	増減 B-A
会議費	10,000	0	-10,000
郵送費	30,000	34,300	4,300
観察会経費	10,000	9,725	-275
交通費	15,000	3,140	-11,860
苗木購入費	45,000	40,840	-4,160
保険代	35,000	31,830	-3,170
渉外費	20,000	20,000	0
雑費	20,000	149,925	129,925
予備費	83,184	6,000	-77,184
合計	268,184	295,760	27,576

平成19年度決算額 83,856円（次年度繰越金）

## (3) 2008年観察会日程

回数	実施日	場所	テーマ	担当
第95回	2月3日（日）	不動湯温泉周辺	冬の動物と冬芽	高橋
第96回	4月27日（日）	高湯蟹ヶ沢	春の草花（イワウチワ）	佐藤
第97回	6月8日（日）	龍ヶ岳	鳩峰植林地除草ボランティアと水源の森観察	高橋
第98回	7月6日（日）	西吾妻山	ロープ補修ボランティアとヒナザクラ観察会	高橋
第99回	8月24日（日）	吾妻谷地平	湿原観察と清掃登山	奥田
第100回	10月19日（日）	高山	紅葉と登山道整備状況の観察	鈴木
第101回	11月30日（日）	霊山	中世の歴史探訪と岩峰の自然・総会	山内

注：予備コース 第95回 思いの滝散策 第96回 微温湯雪ウサギ観察

10月18日は100回記念前夜祭（赤湯温泉）とし、19日のみ参加もOK

## (4) 2008年新役員

代表：高橋 淳一 事務局：佐藤 守 会計：山内幹夫 会計監査：野中 俊夫

会報：佐藤 守、奥田 博、鈴木 勝美 幹事：役員全員

## 東北ブナ紀行（28） 奥田 博

今回で青森・秋田・岩手県の東北北部を終えて東北南部に入りたいが、その前に触れておきたい山として「なめとこ山」を紹介したい。この山はご存知宮沢賢治の童話「なめとこ山の熊」の舞台である。賢治ゆかりの山は東北ブナ紀行では、七時雨山や駒頭山、秋田駒、焼石・栗駒山、方面森などを紹介してきた。それらの山には素晴らしいブナがあった。しかしこの「なめとこ山」と「中山峠」には、そんなブナは精々数本を数える程度。しかし東北のブナの雰囲気を持っている不思議な森だからだ。

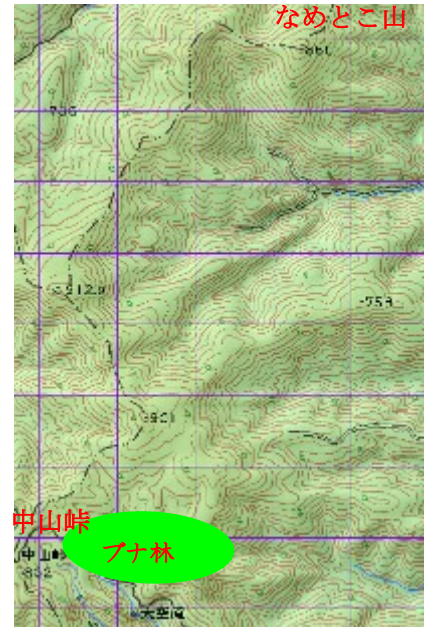
### 5 3) なめとこ山

「なめとこ山と熊」の舞台になったなめとこ山は、長い間、賢治の創り出した架空の山として位置付けられていた。この山は今年9月発行の国土地理院2万5千分の1地形図に認知され、名前が付けられた山である。長い間、860mの無名峰であったが、花巻の佐藤孝さんが、古文書で同定して、それが認知のきっかけであった。私が二度登った際には登山道は無かったが、道が付けられたという情報が寄せられ、再訪することとなった。

豊沢川に架かる橋には、透明なアクリル板が架けてあり、なめとこ山の形と合わせるようになっていた。そこには登山道はありません、と注意書きがあった。車を奥に走らせて、上流の豊沢河を渡って、西股沢に沿って藪の覆う林道を走る。橋の壊れた沢の分岐で車を止め歩き出す。

次の沢の分岐で小さな「なめとこ山」の道標を見る。沢に沿って道は付けられている。沢を渡り、さらに水量の少なくなった沢を登る。途中には滑滝もあってロープにつかまって登る。やがて「小十郎の滝」と名付けられた滑滝から尾根に取り付く急坂に変る。周囲は見事なブナの森とはいえないが、ブナを中心とした森が続く。赤い布に導かれるように進み、やがて見覚えのある尾根に着けば穏やかな尾根になる。笹に覆われたブナ林は、伐採されモヒカン刈り状に残った森で、この状態は山頂まで続く。狭い山頂ではあるが、ブナの森の持つ優しい風を感じる場所だった。

コースタイム：西股沢端(15分)登山口標識(30分)小十郎の滝(30分)尾根(15分)山頂



### 5 4) 中山峠と大空の滝

花巻の奥に、唯一残されたブナの秘境がある。その名を中山峠という。中山峠は賢治が1918年4月と7月に地質調査で訪れている。「中山街道」と称した道は、今は林道の廃道化が進んでいる。立派な沢内村へのトンネルや架橋を作ったが、その観光林道も途中で工事は止った。大空の滝も小さくしか見えない。

上部に登るにつれて、道は舗装が切れ、落ち葉に埋まって自然に回帰しているようにも見えた。やがて、ミズラナやホウヤカエデ類やブナの雑木林からブナの純林へと変わってくる。いわゆる極相林なのだが、林径は比較的細く、二次林にも見える。細くても樹齢は70～120年という説明があった。それは、寒気が厳しいので締まっているために、細いのだという。それにしても、粒が揃っていて素晴らしい林だ。中山峠を越えると、この林は存在しない。ここだけ残ったらしいが、逆を言えば、それまではこの周辺には、ブナの純林が残っていたのだろう。それにしても、花巻から至近の距離にあるブナの楽園。よくぞ残ったというのが印象である。花巻の人たちの努力で今は保護林になっている。

コースタイム：通行止め(2時間)中山峠(1時間30分)通行止め



なめとこ山



中山峠のブナ

ゴヨウイチゴ (*Rubus ikenoensis* バラ科キイチゴ属)

亜高山の針葉樹林の林床に植生する落葉小低木。

葉は互生で、細く硬い毛に被われた長い葉柄の先端に5枚の小葉から成る複葉を水平に開く。これは、木漏れ日を効率的に受け止めるためである。葉全体は均整の取れた五角形。小葉はひし形に近い端正な形で葉縁はリズムミカルな鋸歯を持つ重鋸歯である。中央の小葉(頂小葉)が最大でその主脈を中心に折り込むと残りの左右の4枚の葉が重なる対称形である。葉脈は窪み、鋸歯の先端部まで走る。葉柄の基部には1対の托葉がある。茎はつる性で地を這う匍匐性で2年生になると木質化する。



花は当年枝の先端に1個つく(条件がよければ複数つくこともある)。細い花柄の先に筒状の緑白の花を下向きに咲かせる。といっても花弁はなく、開花は大型のがく片が割れるだけである。がくの数に5個で基部は卵のようにふくらみ先端は2、3裂して鋭くとがる。がくの外側は針状の棘が密生する。筒状部基部は鮮赤色に着色し、がく上の棘針も開花後しばらくは鮮やかな赤色を呈する。がくの内側は多数の雄しべと雌しべが詰まっている。がくは開花後、先端を閉じるが果実の成熟にしたがって再び平開する。果実は赤い液状の核果の集合果である。近縁種のアズマゴヨウイチゴは茎やがくに針状の棘がなく、花弁が7枚あることで区別できる。

ゴヨウイチゴは吾妻連峰のオオシラビソ林の林床でよく見る植物であるが、他の木苺類と異なり、花びらが無いことから、私は長い間、開花しても地味な花という印象を持っていた。今年の夏、高山を散策した折、若いゴヨウイチゴの株に出会った。その株は明るい緑色の葉群の中に赤い物体を点々とちりばめていた。葉はゴヨウイチゴなのにおかしいと思い、眼鏡をはずして、その赤い物体に近づいて観察して初めてそれが花とわかり、その赤い棘の美しさに感動してしばし見入ってしまった。日当たりのいいところでは花柄や葉柄も赤く色づくことも発見であった。

アズマレイジンソウ (*Aconitum pterocaulis* キンポウゲ科トリカブト属)

山地に生える多年草。木漏れ日が差し込む林床で群落を形成する。名前の漢字表記は「麗人草」ではなく「伶人草」である。雅楽を演奏する人を伶人といい、伶人がかぶる冠に花の形が似ていることが名の由来という。

葉は互生、開花時まで根生葉があり、根生葉から中位部までの葉は長い葉柄がある。葉は単葉で5~7深裂し、葉縁は粗い鋸歯がある。上位葉は著しく小さい。

花は茎の先端に花柄を分枝し総状花序を形成する。小花はやや赤みを帯びた紫でトリカブトに似ているが、トリカブトより明らかに小さく質素で奥ゆかしい印象である。花弁のように見えるのは5枚のがくである。花弁はがくの内側に雄しべのような形状で収まっており、先端から蜜を分泌する。外側のがくはスマレの距のような筒状の上部と球状の2枚の側弁、舌状の下部の2枚で構成されている。雄しべは多数あり、雌しべは3個ある。茎やかぶと状のがく、花柄に曲がった毛(屈毛)を密生する。母種のレイジンソウとはこの屈毛の有無で区別する。オクトリカブトと混生するが開花期はオクトリカブトより遅い。オクトリカブト同様、猛毒を有する。



吾妻・安達太良山域に植生するトリカブト類はオクトリカブトと本種の2種のみであるが、自生地はアズマレイジンソウの方が局地的である。本種は、私が花の宝庫として毎年通い続けていた場所で山内氏によって発見された。オクトリカブトが咲き終わり、秋の花はもう終わりだろうとの思い込みが私の見つけ損ねの原因である。地元では、その毒性の強さから事故をおそれ、昔より駆除されてきたという。アズマレイジンソウの自生地が少ないのは、それも一因となっているのかもしれない。

## 第95回自然観察会案内：土湯不動湯温泉周辺の雪上観察会

日時：2008年2月3日（日）8：30～15：00

集合場所：四季の里正面入口駐車場 集合時間：8：30 参加定員：20名

内容：土湯不動湯温泉周辺の動植物の様子を観察します。

準備品：昼食、冬用登山靴または防寒靴、防寒服、防寒帽子、手袋、ワカンまたはスノーシュー・山スキー、ストック、筆記用具、（ルーペ・双眼鏡・各種図鑑）

参加申込先：高橋淳一（024-593-1990・080-3320-1804）または佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします。（電話申込は午後7時～9時までお願いします。）

### 2008年カタクリの会奥羽自然観察会計画

月 日	回数	自然観察会のテーマ	観 察 地
1月20日（日）	205	雪と遊ぼう	西和賀町廻戸
2月17日（日）	206	雪の自然観察	西和賀町沢内
3月16日（日）	207	春を探そう	西和賀町沢内大荒沢
4月27日（日）	208	カタクリの里歩き	西和賀町無地内・廻戸
5月11日（日）	209	夏椿と夏の渡り鳥	西和賀町白木峠
6月8日（日）	210	新緑のブナの森	西和賀町真昼ブナ指標林
7月6日（日）	211	ブナの森の滝巡り	西和賀町下前風景林
8月24日（日）	212	和賀川遊び	西和賀町沢内和賀川源流
9月28日（日）	213	秋のブナの森	西和賀町笹峠
10月19日（日）	214	落葉とキノコ	西和賀町未来の森
11月2日（日）	215	冬の渡り鳥	西和賀町錦秋湖
12月7日（日）	216	初冬の森	西和賀町湯川



\* カタクリの会は西和賀町で、自然観察会開催を目的とした会です。

\* 会則、会費はなく誰でも自由に参加できますが、各観察会の一ヶ月前から電話でのみ受付です。

\* カタクリ通信を偶数月に発行いたしており、希望者には年間千円で送付致します。

（郵便振込みをご利用ください…02350-5-38765 加人者名…カタクリの会）

連絡先：郵便番号 029-5512 和賀郡西和賀町川尻 41-72-15 電話&FAX0197(82)3601 代表：瀬川強

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

【編集後記】■高山の原生林を守る会の設立総会は1987年5月25日に福島市中央公民館で開催された。以来、今年で21回目の冬を迎えようとしている。私は、それまでの登山経験で培った感性のみで参加したのだが、それから20年間、せっせと森に通い、四季折々の自然と接することで山の知識を深め、感性は知識に裏付けられた確信に変わった。■当時、樹を切ることばかり考えていた行政も、表向き自然保護を標榜するようになった。しかし、季節は記録的な温暖化現象を呈しているのは自然の皮肉か。■尾瀬が日光から独立して国立公園になった。行政機関は自然保護を考慮した観光を重点的に推進していくと言う。この二十年間、変わらなかったことがある。それは、「尾瀬は自然保護のシンボルであり、尾瀬の自然を大切にすべき」とのドグマが、身近の自然を破壊することの精神的な免罪符になっていると言う事実である。樹を生物として扱う視点は依然として未成熟である。■ノーベル平和賞を受けたゴアは環境経済学をアメリカで初めて提唱した人物である。そのゴアを1万票差で破って大統領となったブッシュが最大の自然破壊を推進しているのは歴史の皮肉である（MS記）。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第63号 2007年12月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：高橋淳一 Phone 024-593-1990（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木